

2025-2026 フィンドレー大学・福井県奨学生修了報告書

作成者：伊藤桜羽

作成日：2026年5月23日

2025年8月から2026年5月までの約10か月間、アメリカ・オハイオ州のフィンドレー大学で留學生活を送りました。今振り返ると、この10か月間は本当にあっという間でありながら、これまでの人生の中でも特に濃く、充実した時間だったと感じています。留學前は、英語力への不安だけではなく、海外で長期間生活すること自体に大きな緊張を感じていました。これまで20年間福井県で育ってきた私にとって、海外で生活することは未知の経験であり、自分が現地の環境に馴染めるのか、授業についていけるのか、不安に思うことも多くありました。しかし実際に留學生活が始まると、不安以上に新しい発見や刺激に溢れており、毎日が学びの連続でした。この留學は、語学力の向上だけではなく、自分自身の価値観や考え方を大きく変える、かけがえのない経験になったと感じています。

留學中は、主にマーケティングに関する授業を履修しました。アメリカで学ぶマーケティングは、私が想像していた以上に「人」に焦点を当てた学問でした。商品の売り方だけではなく、「人はなぜその商品を選ぶのか」「企業はどのように人の感情や価値観を分析しているのか」といった内容を学ぶ機会が多く、とても興味深く感じました。特に印象に残っているのは、SNSマーケティングや広告戦略についての授業です。現代では、企業は単に商品を宣伝するだけではなく、SNSを通して消費者と関係性を築き、ブランドイメージを形成していることを学びました。実際の企業事例を分析する課題も多く、日本とアメリカでの広告表現や消費者へのアプローチの違いを知ることができたのも非常に面白かったです。また、授業ではグループワークやプレゼンテーションが多く、日本との教育スタイルの違いを強く感じました。アメリカでは、学生一人ひとりが積極的に発言し、自分の意見を持つことが重視されていました。最初の頃は、自分の英語に自信がなく、授業中に発言することへ強い抵抗がありました。しかし、現地の学生たちは私の拙い英語にも真剣に耳を傾けてくれ、「完璧な英語」よりも「自分の考えを伝えようとする姿勢」が大切なのだと感じるようになりました。留學前の私は、失敗することを恐れて慎重になりすぎていた部分がありましたが、この経験を通して、まず挑戦してみることの大切さを学ぶことができました。

マーケティング以外にも、心理学や異文化理解に関する授業を受講しました。心理学の授業では、人間関係や感情、行動心理について学びましたが、その内容は授業だけではなく、実際の留學生活の中でも深く関わっているように感じました。異なる文化背景を持つ人々と関わる中で、自分にとって当たり前だった価値観が、人によって全く異なることを何度も実感しました。例えば、日本では相手に配慮して遠回しに表現する場面が多い一方で、アメリカでは自分の意見をはっきり伝えることが重要視されていました。最初はその

違いに戸惑うこともありましたが、次第に「違いを否定するのではなく、理解しようとする事」が異文化交流において大切なのだと感じるようになりました。

学業面だけではなく、課外活動や日常生活でも多くの貴重な経験をすることができました。特に印象に残っているのは、大学の合唱団活動です。私は留学前、音楽を通してここまで多くの人と繋がれるとは想像していませんでした。合唱団では、毎週の練習や演奏会を通して多くの学生と交流することができました。授業中とは違い、より自然な形でコミュニケーションを取ることができたため、英語への苦手意識も少しずつ薄れていきました。中でも特に忘れられないのが、合唱団で参加したヨーロッパ遠征です。アメリカで出会った仲間たちと共にヨーロッパ各地を訪れ、歴史ある街並みや文化に触れながら演奏を行った経験は、留学生活の中でも特に大切な思い出です。日本で生まれ育った私が、アメリカの大学に留学し、さらにヨーロッパで現地の人々の前で歌っているという状況を、不思議に感じる瞬間もありました。言語や国籍が違っていても、音楽を通して人と繋がることができるという経験は、自分の価値観を大きく広げてくれました。また、遠征中は長時間一緒に過ごすことも多く、友人たちとの距離もさらに縮まりました。深夜まで将来や文化の違いについて語り合った時間も、今では大切な思い出です。

また、この留学生活の中で最も印象に残っているのは、「人との出会い」です。授業や課外活動、ハウスでの共同生活を通して、本当に多くの人と出会いました。最初は、自分の英語が通じなかったらどうしようという不安ばかりでした。しかし、毎日一緒に食事をしたり、買い物へ行ったり、何気ない会話を重ねていく中で、少しずつ英語を「勉強」としてではなく、「人と繋がるための手段」として考えられるようになりました。現地の友人たちは、私を「日本人留学生」としてではなく、一人の友人として接してくれました。友人の家族が家に招待してくれたり、一緒に旅行へ行ったりした経験は、一生忘れることができないと思います。また、別れの際には涙を流しながら「また会おう」と言ってくれる友人もあり、この10か月間で築いた関係の深さを実感しました。留学前は、「海外の友人を作る」ということをどこか特別なことのように感じていましたが、実際には、文化や言語が違っていても、人と人との関係に必要なのは思いやりや相手を知ろうとする気持ちなのだと感じました。

さらに、留学を通して日本を客観的に見る機会も増えました。アメリカで生活する中で、日本の治安の良さや公共交通機関の正確さ、接客の丁寧さなど、日本の素晴らしさを改めて実感しました。一方で、アメリカでは一人ひとりが自分の意見や個性を大切にしており、その姿勢に刺激を受けることも多くありました。友人たちから日本文化について質問されることも多く、日本の食文化や学校生活について説明する中で、自分自身も改めて日本文化の魅力を再認識することができました。特に福井県について話すと、「自然が豊

かで素敵な場所だね」と興味を持ってくれる友人も多く、自分の故郷を誇らしく感じました。もちろん、留学生活は楽しいことばかりではありませんでした。英語が聞き取れず悔しい思いをしたこと、自分の気持ちをうまく伝えられず落ち込んだこと、家族や日本の友人に会えず寂しく感じたこともありました。しかし、そのたびに周囲の友人や先生方に支えられ、乗り越えることができました。以前の私は、「失敗しないこと」を重視していたように思います。しかし留学を通して、「失敗してもいいから、まず挑戦してみること」が自分を成長させるのだと学びました。

この10か月間で経験したことは、とても一つの報告書では書ききれません。授業での学びだけではなく、人との出会い、文化の違い、新しい環境への挑戦、そのすべてが私を大きく成長させてくれました。留学前の自分と比べると、以前よりも新しいことに挑戦することへの抵抗が少なくなり、自分自身に少し自信を持てるようになったと感じています。

最後になりますが、この貴重な留学の機会を与えてくださった福井県、フィンドレー大学、そして留学前から留学中にかけて支えてくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。この留学で得た経験や出会いを今後の人生に活かし、福井県や社会に還元できるよう、これからも努力を続けていきたいと思えます。本当にありがとうございました。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu